

蒙求抄のことば

鈴木博

(1)	カカハユイ	(2)	キゴワ	(3)	メンチャウニ
(4)	キツシク	(5)	凡ソラカナ	(6)	ツブライサカイ
(7)	ヨホウ	(8)	ピラウ	(9)	コケ猿
(10)	ホウカウ	(11)	ヲサアイ	(12)	スタク
(13)	ヨリギナ	(14)	チカリノト	(15)	コゼセラヌ
(16)	理窟	(17)	シキ	(18)	子細モナイ
(19)	ガウギ	(20)	アイヅライ	(21)	トヲノト
(22)	ハウソン	(23)	七マガリ	(24)	候トス
(25)	候トソロ	(26)	御座ル	(27)	マラスル
(28)	ヨシビ	(29)	トボス	(30)	諺
(31)	字音				

清原宣賢が大永・享祿の頃に蒙求を講述した系統に属する諸本について、かつて述べたことがあるが、『國語國文』45年9月、ここに主としてそれらの對校を通して拾い上げられることばの幾つかについて述べようと思う。諸本の略稱は次のとおりである。

蒙求抄のことば

首書本||京大清家文庫藏の蒙求。卷上・中・下の三冊。
 聽塵||蒙求聽塵。宣賢の手控えのカナ抄でナリ体。自筆本(上・中・下の三冊)が慶應義塾圖書館にあり、轉寫本が京大・穗久邇文庫(共に第一冊目欠)や大東急文庫(三冊)などにある。
 三冊本||兩足院藏の天文十七年寫の有欠本。現存は卷上ノ上・卷上ノ下・卷中ノ下の三冊。ゾ體で誤寫がきわめて少ない。
 四冊本||兩足院藏の有欠本。現存は卷上ノ上・卷上ノ中・卷上ノ下・卷中ノ下であつて、三冊本と比べると卷中ノ下が十二丁分ほど多い。ゾ體で内容的に版本と近い。
 陽明本||陽明文庫藏の寫本。ゾ體で五冊完本であるが早川光三郎氏の述べておられるように、低級な誤りが見られる。(滋賀大學教育學部紀要20)。
 七冊本||古活字版。京大國文研究室(書入れが多數)や宮内庁書陵部などに所藏。これについては書陵部藏本を底本とする『抄物資料集成』(清文堂)中の拙稿解題でやや詳しく述べている。
 十冊本||寛永十五年整版。『國書總目錄』に見るように各所にあ

る。架藏。

蓬左本||蓬左文庫藏。ゾ體で全三冊の寫本。早川氏論稿(滋賀大學教育學部紀要18・20)参照。

米澤本||米澤市立圖書館藏のゾ體寫本。現存は卷上・中の二冊で、下を欠く。前掲早川氏論稿参照。

(1)「カカハユイ」と「カカハイ」
三冊本に

コチガテラサレテ、カ、ハユイソ(上ノ上12ウ)
とある「カ、ハユイ」は、聽塵にも

アナタヨリ照サレテ、コナタカカ、ハユキヤウ也。

とあつて、三冊本が聽塵から忠實に受けついでいることが知られる。ところが四冊本に至ると、「ユ」を脱したのか、「カ、ハイソ」となり、版本の七冊本・十冊本(一4オ)もそのまま「カ、ハイ」としてしまった。大辭典(平凡社)には「まぶしい」意の方言として「かかはゆい」・「かがはゆい」・「かがはい」の類が載っているが、文明本節用集には「怕日」^{カクハユイ}の方だけ、そして日葡辭書も *Cacafayuy* (カカハユイ、ただし意味は「恥辱」)だけが出ている。語源的には「カカハユシ」の「カカ」は「輝く」(當時は清音「カカヤク」)の「かか」と同じで、「ハユシ」は「映ゆし」であろう。日葡辭書に説くような意味での「カカハユイ」も聽塵に次のように用いられている。

珠玉ヲナラヘヨク坐敷ヘハ、ホヒロイスカタニテハ、カ、ハユクテ、イカレス(京大本、中一〇〇オ)

首書本によれば原文は次のとおりである。

珠玉在^{カクハユイ}側、覺^{オホフ}我形^{ケカラハンキ}穢^一。

(2)「キゴワ」(氣強)

七冊本に

特立ハ人ナミ^ノニナイ者ソ。キコワナ正直ナ者ソ(二11ウ)

とある傍線部を、十冊本は「ギゴワ」と濁點を施した。しかし寫本へさかのぼると三冊本も四冊本も「キゴワ」である。大辭典に「キゴワ」と「ギゴワ」との兩方の例を抄物から擧げ、蒙求抄の右の例を史記抄の用例とともに「ギゴワ」の方に引いているのは、十冊本に據ったためかと思われるけれども、しかし寫本の状況から推して「キゴワ」と考えた方がよいのではなからうか。この抄文は「特立剛直」の解であるが、四冊本は「キゴワナ」の前に「剛直ハ」を補入しようとしている。つまり「剛」が「キゴワ」にあたるわけである。伊呂波字類抄には「木強^{キコハツ}」(キの疊字)と清音で出ているけれども、類聚名義抄には「木強^{キコハツ}」(僧中二四)と「コ」が濁っている。「氣強し」の意であろう。

(3)「メンチャウ(面頂)ニ」

ナセニ此間ハ久ク御イリナイソト云ハハ、細々參リタケレトモ、諸葛豐ニアウタラハ、面丁ニ悪ク云レウ程ニト存シテ、自然、道ニテモアフテト存シテ、マイラヌト、カウ云ソ(七冊本、二12オ)

右の文中の「面丁ニ」は、「面頂ニ」・「メンチャウニ」と記されている聽塵の左例と同様に、「目の前で」とか「面と向かつて」とかの意であろう。

人ノワルキ事ヲハ、面頂^{メンチャウ}ニ云テ、カケニテハワルクイハス。カケ

ニテハ其人ノ所長ノヨキ處ヲホムル也（京大藏、下47オ。「面告」
其短、而退稱「所長」の解）

メンチャウニ、人ヲワルク云テ、人ノ過ヲ、ミノカラカス事ナシ
（下54オ。「面折」不能「容三人之過」の解）

(4) 「蓄縮（キフシク・キツシク・キクシク）」

蓄縮謂「於事」也ト師古カシタソ。人ノキツシクナト世話ニ云
カ、此チャケナソ。キクノ音モ有ホトニソ（七冊本、二12ウ。ただ
シルビヤ送りなどは寫本および十冊本による。三冊本のルビは「キ
ク」のようにも見える）

右のところを聽塵で見ると左のようであつて、語義が示されている。

師古曰、蓄縮謂「於事」、物ヲ惜テ欲フカキヨ云（大東急本）

「きつしく」は狂言辭典・近世上方語辭典・雜俳語辭典などにも採ら
れているが、律氣・几帳面・頑固・無愛想・無骨・堅い形などと説か
れており、意義の變遷があるようである。

(5) 「凡ソラカナ」

凡俗ナ世界ツレソ。大概トクナ、凡ソラカナ者ソ（七冊本、二12ウ）
四冊本は「凡ソラカナ」の右に「イキタラヌト云心ソ」と傍記してい
る。なお三冊本・四冊本は右の文中の「ト」に濁點を附している。

(6) 「ツブライサカイ」

此分テナルマイ。マウ歸ト云テ、ツブライサカイヲスルト、カウ
語ソ（七冊本、二19オ）

聽塵にも右に相當するところに

エヒスカ、ツブライサカイヲスル也。

蒙求抄のことば

とある。聽塵・三冊本・版本には濁點がないけれども、四冊本は「ブ」
と濁る。「ツブラ、イサカイ」は、「小さい、いさかい（争）」の意で
あろう。

(7) 「ヨホウ」（四方）

方ハ四方ナ心ソ。去ホトニ、ホウトヨマウト云義アレトモ、ハウ
ト云タリトモ同シコトソ（七冊本、二28オ）

右は三冊本・四冊本・十冊本も同様であるが、聽塵には次のようにあ
る。

ヨホウナル物ノ如ク正直也。方トヨムヘシ。

「宣賢は、はじめは「方」は「ヨホウ」の意だから「ホウ」と合音に讀
むべきであると考えていたけれども、後には開音「ハウ」と讀んでも
よいと考えるに至つたのであろうか。聽塵は七冊本の二74ウ・75ウの
「四方ナ」に對しても、「方ハヨホウ也」・「ヨホウナル」と合音に記
している。「四方」については池上禎造先生（島田教授 國文學論集）
・福島邦道氏（『國語學』46）の論稿がある。

(8) 「ビラウ」（疲勞）

天子カラ給ハル物ヲモ、ヒラウシタ親類ニトラスルソ（七冊本、
二29ウ）

右の「ヒラウ」に對して、聽塵（大東急本）は濁點を打ち、

朝廷ヨリ下サル、物ヲハ、ビラウシタル一族ニワカツ也。

と記す。「貧ナレハ人カ來ラヌ」（七冊本、一49オ）狀を述べるあたり
も、聽塵（同前）は

ビラウシタル時也。

と濁っている。この語については湯澤幸吉郎博士『國語學論考』二三
五頁・福島氏『言語と文藝』44年7月)の考説があるが、『犬筑波集
研究と諸本』(福井久藏博士)の

びらうに見ゆる秋の夕暮、手ばかりは六寸ばかりつきいで、(三
三頁)

の「びらう」も、開合の上から「尾籠」(びろう)ではなくて、この貧
乏の意の「疲勞」(びらう)であろう。ついでに「貧乏」を「貧實」と
表記した例が漢書列傳抄(綿谷講、景徐聞書)にある。

上へクチヒロノの細處カ、口ノ中へ入カ貧實相ソ(11画)

「乏」の字音に關しては次のような記述もある。

短乏^{ホッ}……短乏^{ホッ}トヨムハ非也。乏^{ホッ}トヨムナリ(寛永十八年版、碧巖抄、
十50オ)

(9)「コケ猿」

三冊本・四冊本に

タ、猿マテソ。コケ猿ヲ云テ候ソ。猿ト犬トイカミヤウ處ヲ云タ
チャソ。

とある傍線部を版本は脱している(七冊本241ウにあたる)。この中の
「コケ猿」の語は、聽塵でも左のように用いられていて、年経た猿
〔國文學放〕35年5月の拙稿参照)を意味している。

沐猴ハ水ニヌレ湯アヒタル猿ニハアラス、コケ猿也。百年モ二百
年モヘタル猿也。猿ト犬トイサカフマネヲスル也。師古曰、沐
猴、獼猴也。

七冊本の

ヲウチホトナ老者ヲ集ルソ(一48ウ)

に相當するところを聽塵では

年ヨリノコケタル大父ノ如キ者ヲ友トスル也。

と記しているが、この「コケタル」も年長の意である。

(10)「ホウカウ」

牛渚八月ノ名所ソ。須磨明石ノヤウナ處ソ。微服イヤシイ衣裳
ソ。官人ノ官衣ヲ取ノケテソ。、サウニ成テ人ニマキレテソ。日
本ノホウカウナトスル心ソ。袁宏舟ニノツテ詩ナトウタウタ、面
白カツタソ(七冊本、二56オ)

右の「ホウカウ」は意味上からは「彷徨」(はうくわう)があたりそう
であるけれども、開合の點でも直拗の點でも相違がある上に、「彷徨」
は莊子や史記などの漢籍に見える語であつて、「日本ノ」と述べてい
るところとも齟齬するであろう。「歩行」(はかう)の長音化と見るこ
とも「日本ノ」とある點からは同様に難があろう。すでに『國語學』
76集一〇三頁・同85集六一頁に説かれているように、この「ホウカ
ウ」は「ほおかぶり」の意と解される。中華若木詩抄(寫本)に用例
があり、兩足院本節用集の財寶門に「臙甲^{ホウカウ}カクル」とあり、日葡辭
書に登載されていることなど、そしていま糸魚川地方に残っているこ
とが明らかにされている。

(11)「ヨサアイ」と「ヨサナイ」

ヨサアイ者ハ物ニカ、ツテナラテハ立ヌホトニ云ソ。マタ別ノ義
モアレトモ、マツカウソ。ワラウヘノコトソ(七冊本、三51オ)

三冊本、四冊本も右と同様に「ヨサアイ」とあるが、十冊本は「ヨサ

ナイ」にしている。講抄時は「ヨサアイ」であつたであろう。「幼い」を「ヨサアイ」と記す例は中近世にあり、大辞典には義經記や論語抄などから引例している。

(12) 「スタク」

世界アツケレハソ、スタクラウ（七冊本、四四ウ）

陽明本も同様であるが（十冊本は「ソ」を「コン」）、この中の動詞「スタク」は喘ぐ意で、その用例はヴァチカン圖書館藏バレット寫本（二五九二）一二〇丁裏にも左のように見られる。

お乳の女、などは得心を亂らして、心も心ならねば足の踏みども覺えず走りちだめきてイゲレイジャへ參れども、餘りにすたき喘ぎて息をつぎ得ざればしは物申す事も叶はず（土井忠生先生翻字「我がドミナにして天使の元后たるビルゼンの奇蹟物語」——『キリシタン研究第七輯』第二部二九頁——による）

降つて文政十三年（一八三〇）の本朝醫談（杏林叢書第一輯）に

經書に博士家の古訓ある如く醫書にも古訓あり。

發熱ミホトヨリ 喘息アヘキスタク

の類也。福田方に儒士學生のよみ頗異なる間、訓注を添るよしいへり。昔時典藥寮のよみくせなるべし。

とあつて、「室町時代の俗語」〔圖説日本文化史大系7〕の圖版三七八解説——龜井孝氏）であつたこのことばも、江戸後期では古訓とされてしまつてゐる。〔補注〕

(13) 「ヨリギ（依氣）ナ」

時に武帝ヨリ義ナ人テ、ヒルネヲシテ夢ニ人形カ來テ打擲シタ處

蒙求抄のことば

テ、宮中ヲホラセラレタ事ソ（七冊本、四四オ）

右の傍線部は十冊本にない。陽明本はかながきで「ヨリキ」とした右に「依氣」と記している。日葡辭書には Yorigina fito（ヨリギナヒト）と濁音形で標出して、「たやすく一方に傾く人」と説いている。

(14) 「チカリ〜ト」

首書本に

有^{アシタタル}ニ躰^{シツム}者^シ。槃散^{シツム}行^シ波^シ。

とある「槃散」について宣賢系の寫刊本のほとんどは述べていず（七冊本では五65オに相當）、蓬左本は

槃——ハ、行^ツ不進貌ト云。

と記すに過ぎない。しかし聽塵には

槃散ハ、腰ヲチカリ〜トトヒク體也。散ハ寒韻ニテ平聲ニツカフ。

と（「腰ヲ、チカリ〜ト」か、「腰ヲチ、カリ〜ト」かは他の用例が未見なので決めたいが、「應前者とする」、びっこを引く形容に珍しいオノマトペを使っている。〔補注〕

(15) 「コゼ、ラヌ」・「コゼカム」

三冊本に

簡ハ大度ナ事ソ。大サハヤカニシテ、小ゼ、ラヌソ（上ノ上12ウ）

とある傍線部は、また

開大ナ貌ソ。コセ、ラヌ、クワイナ人テ有タソ（上ノ上51オ。四冊

本は「セ」に濁點）

とある。版本（七冊本一3ウ・61オ）は兩箇所とも躍り字を脱している

が、こせくする意の動詞「せせる」に接頭辭「こ」が付き、その打消表現が右の「コゼ、ラヌ」である。動詞「せせる」の用例も蒙求抄に次のように見られる。

煩苛ハ、セ、リムツカシイ法ソ。ワツラハシウ、カライト讀付タ
レトモ、キフイ事テハナイソ。苛ハ小草也。繁細也。コセカメタ
方ヲ云ソ（三冊本、上ノ上56ウ）

右の「コセカメタ」を版本（七冊本29オ）は「メ」を誤脱して「コセカタ」としているが、この「コ」も前述の「コ」と同様の接頭辭かと思われる。ところで「コセカム」は下二段にも四段にも活用したように、次のような例もある。

大略ハ大ナハカリコトソ。コセカマヌコトソ（七冊本、157ウ）

右の「セ」に對して三冊本・四冊本は濁點を施しており、「コ」を冠する場合は、「セセル」の場合と同様に連濁現象をおこして「コゼカム」となったと思われる。大辭典は「コセガマヌ」として濁點の位置が異なるが、これは「せがむ」という動詞に接頭辭「こ」がついたものと見たからであろう。「コセカム」は他抄にも用いられている。

苛政ハ、コセカムソ。カライト云ハ惡ソ。桂林ハ青松√ノ云ソ（鹿
王院藏、湖鏡集、86オ）

(6) 「理窟」

勃率ハ比興ナル貌ソ。サレトモ理ヲハ知タ者チャホトニ理ノ窟ト
云ソ（七冊本、567ウ）

右は首書本の

勃率^{ソツシ}爲^{ナス}ニ理窟^{コツ}。

にあたる抄文であるが、「理窟」の語源解が聽塵に左のように述べられている。

義理ヲタクサンニ云出スハ、窟ノホラナトヨリワク如キヲ理窟ト
云。

ちなみに大言海では左のように説かれていて、理の赴く方向が逆のように思われる（大辭典も同様）。

理窟^{ソツシ}ノ意ニテ、理ノアツマル所ノ義。

(例) 「シキ」と「シキく」

世話ニ勸學院ノ雀ハ蒙求ヲ轉ト云ハ、李潸カツカウ小女ノ名ヲ雀
ト云者ソ。其マテ此蒙求ヲ轉ソ。シキノ雀テハ無ソ（七冊本、序二
1ウ）

箒^トヲハ、シキノ車ニハフカヌモノ也。疲勞スルホトニ薦^{コト}ノヤウナ
ル物ヲフクヲ云、故ニ薄ト云、小車也（聽塵、大東急本、上59ウ）

アレハ式ノ人ニハアラス。私ノ作タル人形也（聽塵、慶應本、中62
オ）

本有ノ理ヲ金丹ト云、シキノ金銀ニワアラス。名ヲ借テ云トモイ
ヘリ（同、穗久邇本、下。京大本17ウは「シキノ金丹ニハ」と誤る。慶應
本は「金銀」。したがって穗久邇本が京大本の轉寫ではないことが明らか
である）

これらの「シキ」は本當とか本式とかの意で、他抄にも

式ノハクチ^ハ博奕^ヲテハアルマイソ（文明十四年桃源講景徐聞書、漢
書列傳抄、48面）

のように用いられている。左の「シキく」はこの語を重ねたもので

ある。

音楽ヲモ吾カ爲ニハ、シキ〜ニハ、イヤト云ソ(米澤本、中29ウ)
他抄からも擧げる。

魯論ニ割雞焉用牛刀ト云ハ、チツトナル小邑マテ禮樂ヲスルニ云
タ事ソ。鶏ノ小ナル者ヲサクニ牛ノ大ナル刀ニテキラバ、ナニカ
ヨカラソ。小寺ナントニ禮樂ヲシキ〜ニ行ウナントニ云事ソ
(湖鏡集、一二四ウ)

僧カマタ擬義スル程ニ、ヲノレガ羊ナ叶ヌモノヲ百千人打テモ、
ナンノヤクニモタヌ。シキ〜ノモノヲ一人モ打出ヌト也(承
應二年版、眞歇拈古鈔、10オ)

⑧「子細モナイ」

二三升ト云ハ、コチテハ子細モナイ事ナレトモ、器物カ少ニソア
ルラン也(七冊本、六5ウ)

右の「子細モナイ」は、聽塵にこの文にあたるものが次のように説か
れている點を考え合わせると、原義の意のようであつて「少ない量で
ない」と解される。

一日ニ、三四升ハ、コナタニテハ大食トモ云ヘキカ。器物カ少歟。

⑨「ガウギ」(剛毅)

吾性ノカウキナルヲタハ矯^ノメテヨイテノ心ソ(七冊本、七6ウ)

右の「カウキ」は、聽塵に

剛毅ナル性ヲ、タメナユス也。

とある「剛毅」のながきかと思われるが、陽明本と十冊本とは「ガ
ウギ」と濁っている。蒙求抄には、他に「豪儀」の用例が

蒙求抄のことば

豪儀ナ、ヨコツタ物テアツタソ(七冊本、四34ウ)。「性、豪侈」の解

とあり、「剛」を濁るのはこれとの混同が生じたためかも知れない。
文明本節用集には「剛毅」は左のように「カウギ」とふりがなされて
いる。

剛毅木訥カウギボクダツ、チカシシ 近仁チカシ

[補注3]

⑩「アイヅライ」

七冊本の

反問ハ、軍中ヲアルク者ソ(七28ウ)

に相當するところを、聽塵では左のように記している。

反問トハ、敵御方ヲアルキテ、アイツライスルモノ也。

「アイ」は「相」で、「ツライ」は「つらふ」(すなわち「つる+ふ」
の名詞形であろう。熟合時に「ヅ」と濁音化したよう(慶應本には
左肩に朱濁)、後には連濁の「ヅ」から「ズ」へ四つがなの混同が生
じ、江戸時代に用例の見える「あひずり」(一味の意)へ移っていった
のではないかと思われる。

⑪「トヲ〜ト」

遠汲トハ、水クミニ、トヲ〜ト行テ溺死タソ(七冊本、七34オ)

右の「トヲ〜」は「遠々」であろう。「とぼ〜と」の源は、この
「遠々」とであろうか。「トヲ〜ト」の用例は他抄にもある。

長一宮ハ長僧宮^ノニアル者モ隨分ニ獨眼テ此秋殿ノ裡ニイタカ、ト
ヨ〜ト笑語ノ者カ天上ヨリ來ルヲト聞テ居タソ。眞ニキケン

ヨサウニ笑テ語ル者カ天上ヨリシテキタソ(湖鏡集21オ)。「隨分ニ獨

眼秋殿裡、遙聞語笑自天來」の解)

(2) 「ハウソン」

イカナ寵アル外戚カタ御一族テマリ、チトモハウソンヲ、カヌソ
(七冊本、一34ウ)

右は「凡所ニ糾劾、不_レ避_ニ寵戚_ニ」の解にあたるが、「ハウソン」は「方寸」のu母音がo母音に轉化したものであろうか。〔補注4〕

(2) 「九マ加里」と「七マ加里」

九折坂ハ、サカシイ山ソ。九マカリノ坂テソアルラン (七冊本、
六46ウ)

右は、聽塵にさかのぼると

九折坂ハ、九ノマカリノ坂ナルヘシ。

歌道ニツムラフット云路也。鞍馬ノ七マカリノ類也。(慶應本。「歌」は京大本「歌」)

とあり、「九マ加里」は「原漢文の「九折」の直譯で、「七マ加里」が日本風の言いかたである。

(2) 「候」と「ス」

此水ヲ飲メハ、アクコモナイ欲カ、テクルテ候ソ (七冊本、四4ウ)
右の「候」を陽明本は「ス」と記す。「候」という字の崩れた形をかなの「ス」と見誤ったための誤寫かと思われる。逆に版本の

狄儀トスカ、儀狄テアラウスソ (七冊本、四14ウ)

の傍線部の「ス」は、「候」の誤りと見られる。このような誤りが行なわれた背景には「候」ということばの、ちびた形である「す」の實在、使用が考えられる。「候」の用例を他抄や室町時代小歌集(笹野堅氏編)、閑吟集(岩波文庫)、大藏流狂言(虎明本||古本能狂言集、虎清本||安田文庫藏八番、虎寛本||岩波文庫)から取り出すと、次のようである。

軍幕ヲウタヌサキニクタヒレテスナト、ハ云マイソ(仁和寺藏、黄石公三略抄、寫一冊)

手ノヒナ事ハイヤテスト云テ、手ノヒラヲ以テ黄檗ヲ打レタ。師家ヲ打モ處ニヨツテヨウ打ハ、無禮ニナラヌソ(鹿王院藏、臨濟禪師語錄鈔、65ウ)

今朝の嵐は嵐では無げに候よの大井川の河の瀬の音ぢやげに候よ
のう(閑32頁)

今朝の朝寝は朝寝では無げにすよの。過ぎし夜の名残げにすよの
(室77頁)

はなをかがうといふても大事な事がすよ(清「さるざとう」)

それがしは此のあたりのものじやが、のあそびに出てすよ(清「きんや」)

それがしもよばはつてとをらふ、すゑひろがりかひす(明「すゑひろがり」)

行々は用にも立うものとおもふて満足してす(寛「秀句傘」)
蒙求抄の版本中にもなお次のように見られる。

② 學問稽古能藝モ無用スヨト云ソ (七冊本、二77オ)

③ 妻カ教訓シテスト云タ (五1ウ)

④ 我コソ劉寵スヨトホコラヌホトニ (七50ウ)

これらを寫本について見ると、②は三冊本・四冊本も同様で、③は三冊本欠、四冊本は「候」の草體で、④は陽明本も「ス」である。「候」の字で書かれたものの中にも「ス」と發音されたものもあつたかも知れず、講抄時の實際をうかがうことは必ずしも容易でない。蒙求抄の

中には、たとえば

マイラス候ワウ（七冊本、三〇オ）

のように、「候」の字が「さうらふ」の漢字がきであるとは認められる（ただし「そろ」とも讀める）場合がかなりある一方で、「サウ」・「ソウ」・「ス」等のかながきも存するからである。

⑦「候」と「ソロ」

學問ヲシタ者テ候ト云ソ（七冊本、七九ウ）

の「候」を、陽明本は「ソロ」とかながきしているが、陽明本にはこのような例がしばしばある。「ソロ」に關して他資料に次のような記述がある。

……候イトハ、男ノ辭也。ソロトハ、女ノ辭也（蓬左文庫藏、庭訓往來抄、寫一冊、三オの上欄書込み）

論義ノ候ヲ、南都ハ、ソウロウト引テ云ヒ、三井寺ハ、ソロト云

ヒ、山門ハ、ソウト云フ（曼殊院藏、講演故實記、江戸期寫一冊）

毛詩抄においても、京大圖書館藏の十冊本に「ヨリソロへ」・「此ヤウニコソソロへ」とあるのが、同じく二十冊本では「ヨリ候へ」・「此ヤウニコソ候へ」と記されているような例がある（岩波文庫本では(-)89・90頁）。京大國文研究室藏の零本も十冊本と同様に「ソロ」が使われている。

男ハ、祝着ニソロ、ナト云へハ、女ハ、ヨウレシウソロ、ナト云ト同事ソ。

のようにある。この毛詩抄の文では男女ともに「ソロ」を用いているわけで、前引の庭訓往來抄の書込みとは背馳する。「ソロ」は、ほか

に抄物では三體詩鈔（寛永十四年版）・臨濟錄抄（京大國文研究室藏の寫本）・大惠書抄（寛永十一年版）・碧岩抄（寛永十八年版）・本則抄（寛永十九年版）などにも見られる。

⑧「御座アル」と「御座ル」

文帝ノ御座ルカ西テソ有ラウ（七冊本、五十一オ）

の傍線部は、四冊本・陽明本も同様であるが、十冊本は「御座アル」と「ア」を補入している。しかし「御座アル」と讀ませようとしたのは十冊本版行時の恣意であろう。ところで次の例は四冊本も「御座アル」である。

幼主テ御座アルホトニ（七冊本、一三七オ）

しかし三冊本へさかのばれば、これも「御座ル」とあり、四冊本以降が「御座アル」としたものであることがわかる。ただし湯澤博士が『室町時代の言語研究』一一四・一九九頁に引かれた

陛下ハ已聖德御座アツテ、シカモ漢ノ中興王テ御座アルト云ニ

（七冊本、三四十オ）

見奉レハ御病ハ大事テ御座アルカ、天下ノ事ヲモ我ラトモトハ計ラハイテ……（二一六オ）

の傍線部は、三冊本も同様であり、

天下ノ百姓カ東宮テ御座有ト云コトヲ皆知タソ（四二オ）

の傍線部も、陽明本「御座アル」であって、講抄時に「ゴザアル」と「ゴザル」との兩形がある（あるいは中間形「ゴザール」も）用いられたように思われる。

⑨「マイラスル」と「マラスル」

三冊本・四冊本で

夏殿周ノ三代ノヤウニ、ナシマイラセウソ。

とあるのが、版本では「イ」を脱して「ナシマラセウソ」(一六ウ)とするのがある反面、逆に三冊本・四冊本の左の傍線部「マラセ」に對して、版本(七冊本、二32ウ)は「マイラセ」とする。

……惠帝ニカ、セマラセテ、マラセラレタソ。ソコテ、サテハ文章ヲモカ、ル、ト思フテ位ニ即マラセラレタソ。

傍線部よりも前にある「マラセ」は、版本も寫本のとおりなので、版本の「マイラセ」は「イ」の誤入と見られるが、他の諸例を考え合わせて講抄時に兩形の併用があつたと思われる。

(28)「ヨシビ」と「ヨシミ」

七冊本の「音信ノヨシミ」(六11オ)の傍線部は陽明本・十冊本も同様であるが、聽塵は「ヒ」とする。同様の「ヨシヒ」の例は聽塵にはさらにあり(京大本、中の終丁オ、下60ウ)、これらの「ヒ」は濁音で、「ヨシビ」と「ヨシミ」とはバ行音とマ行音との交替例と見られる。

一般的にバ行音とマ行音との交替例はよく見られるが、奈良時代にマ行音であつたもので平安時代にバ行音化したものが多く、室町時代にはバ行音からマ行音へ移行する傾向が強い。この語は語源的には形容詞「よし」に接尾辭「ぶ」あるいは「む」が付いて動詞化したものであるが、ただ通例、形容詞から動詞を作る場合は、ク活用では語幹に、シク活用では終止形に、「ぶ」あるいは「む」を付して、たとえば「高む」、「悲しむ」のようにするのに、この場合はク活用の終止形に動詞性接尾辭を付したことになる點で異例である(ちなみに似たよう

な例外的事象として、ク活用の語幹・シク活用の終止形に、名詞が付いて「淺瀬」、「うれし涙」のごとき複合名詞が作られる一般例に反して、ク活用「無し」の場合は終止形の下に名詞が付いて「棚無し小舟」、「よしなしごと」のような形になる、ということがある)。

これとは逆に聽塵でマ行の

結納ハ志ヲハコムヲ云。

が、三冊本・四冊本・版本も「ハコフ」(七冊本、一21ウ)とバ行にしている例があるけれども、これをもつて「ハコブ」の方が口頭語的と言つてよいかどうか疑問である。というのは他抄に「ハコム」が見えるからである。

漕ハ物ヲハコムソ。輓ハ引ソ(綿谷講景徐聞書、漢書列傳抄、8面)

同様に「沐」の訓として首書本に「アムル」、聽塵でも「ユアムルニ」とマ行に記すものを三冊本・四冊本・版本は「ユアフル」とバ行のよう記す例がある(七冊本、五17オ)。しかし聽塵にもバ行の「アヒタル」の例のあること四四頁上段の引例中に見ることくであり、語によつては兩様の言いかたがあつたように思われる。しかし版本の「シモヘトナツテイ」(七冊本、四74ウ)が、陽明本で「シホヘトナツテ」とバ行音のように記されているのは、どの程度一般性があつたのか疑わしい。

卷一の内題に三冊本が

標題徐狀元補注蒙求卷上(十冊本の「ボキウ」は誤りであろう)

とふりがなするが、「蒙」が「モウ」でなく「ボウ」とあるのは古くからの読みならわしであろう。

(29)「トボス」と「トモス」

七冊本の「火ヲトモス」(七51オ)の「モ」に對して、京大版本は墨筆で濁點を施している。「ボ」と讀もうとしたのであろう。「トボス」の例は詩學大成抄(米澤市立圖書館藏)に左のようにある。

帳中ニイテ同學ノ衆ト燈ヲトボイテ書ヲ讀ソ(一16オ)

この語は百二十句本平家物語(京都府立総合資料館藏)では、バ行音とマ行音との兩形に記されているようであるが、天草版平家物語ではすべてマ行音に綴られている(拙稿「中世國語におけるバ行音とマ行音との交替」34年3月)。

(80)「地獄ノ沙汰モ錢テスル」

京大版本の二75ウの上部欄外に

地獄ノ沙汰モ錢テスル也ト云ソ。

とあるのは聽塵に見えず、何によつたのかがわからないけれども、77オの左の抄文と相應するものであろう。とすれば書入れるべき位置を誤っていることになるが、このような書入れ位置の誤りが、まれに見られる。

諺曰——コトワサニモ申ソ。祈禱ヲスレハ鬼神ヲモ使フ理ソ。耳

カナケレトモ錢タニアレハ鬼神ヲモツカウ。錢カハシリマウテコ

チノ云コトヲ聞ケト鬼神ニ云付ネトモ、自ツカワル、也。

犬筑波集にも同様の諺が左のように見えるが、江戸時代にはいると「地獄の沙汰も金次第」と言うのが普通になったようである。

聞けばただ地獄の沙汰も錢なれや、立山領を守護ぞおさむる(福

井博士前掲書九六・四六三頁)

次の「エテノ長刀」も當時の諺と思われる。

蒙求抄のことば

宣賢曰、エテノ長刀チャホトニヨク知タソ(一43オ)

七冊本二7オの「鬼ノ目ニ涙ソ」は、三冊本・四冊本では「鬼ノ目ニモ涙ソ」とあり、版本は「モ」を誤脱している。

(81) 字音と意味との關連について

「覆」の字音が「フ」の場合と「フク」の場合とで、意味が相違することを七冊本には次のように述べている。

覆ノ字ハ、フノ音ノ時ハ、ヨ、ウ、フクノ音ノ時ハ、クツカヘスト云心也。教家ノ律ナントニハ、覆ノ時ハ、ヨ、ウ也、フノ音ノ

時ハ、クツカヘスト心得ルソ(六36オ。陽明本は傍線部にふりがな「フク」)

聽塵にも左のように記す。

覆フ音、オホフ也 教家ノ律ナトニハ、カイサマ也。覆フ音、

オホフ也 罪ヲカクスヲ律ニ覆藏罪ト云、是フク音、オホフ心

也。

「食」の字音についても聽塵に左のようにある。「顔回簞瓢」の箇所であるが、七冊本六17ウにはこのようなことは述べられていない。

食クイモノ時、シ音
クラフ時、シヨク音

ほかに似たような例として次のようなものが見いだされる。

向ハ、上ニアル時ハ、シャウノ音、下ニアル時ハ、キヤウノ音ソ(二63オ)

説ノ音ノ時ハ、クリカヘシク、トクヲ云也(六35オ。ただしふり

がなは聽塵・陽明本・十冊本による)

樂變化天 兩点 寺門ハ、ラク、南都ハ、ゲウ(京大版本三33ウの上部

欄外書入れ)

また同一の固有名詞で讀書の際の正統的な読みかたをする際と、日常的に話す際とで異なる例が、左のように述べられている。

淮南——書テハ、クワイナン、口テハ、エナンシソ(七冊本、四
ウ)

淮南子、書テハ、クハイナンシ、口テ云時ハ、エナンシソ。叢林

ニハ、ワイトヨムルカ、コチニハ、クワイトヨムソ。何トシタ事

ヤラウソ(七冊本、五33オ。四冊本は「コチ」の右に「清家」と注記)

さらに七冊本の一13ウ「即帝位至符堅始盛准水肥水」の「准水」の箇所に、三冊本・四冊本は

書テハ、クワイ、タハハ、ワイ。

と記し、三冊本は「准」の右に「クワイ」とふりがなしている。ほか

家語、只云時ハ、ケコソ(七冊本、二6オ。ただしふりがなは三冊本

・四冊本による)

説文、是モ只云時ハ、モント吳音ニ云ソ(五13オ。ただしふりがなは三冊本・四冊本による)

等があるが、これらは來田隆氏(『國語學』84)・松井利彦氏(『國語國文』46年5月)の述べられたように、ただ口頭で言う時は吳音に言っても、漢籍讀書の際は漢音によるべきことを指示している。

補注

〔1〕文祿五年(一五九六)成立の大成和抄に

喘急——喘ハアヘグトヨム。呼吸ノスタクコト也。世俗、喘促ト云。促

ト急ト同。息ノ促也(25ウ)

とある。

〔2〕狂言辭典に「ちんがり」の例があけてあり、四河入海には左のように

「チガくト」の例があるので、聽塵の例も「チガリくト」と濁るべきかも知れない。

譬ハハ學ニ行於邯鄲。其アユミヤウヲ、エマナヒエスシテ只チガくト腰ヲヒイテカヘルカ如キノ。踔躡ハ行コトノスクニナイヲ云ソ

(東福寺本、一一下54オ)

〔3〕論語私抄(綜合資料館蔵)の左の「強義」は、「強」字にも「義」字にも左肩に。符があり「ガウギ」と讀むべきことを示している。

強義ナ者ノアタマヲモハリサウナ者ヲハエ悪ウイワイデ、ケツクホメツナントスルソ(三68ウ。「今之狂也」の解の一部)

〔4〕「芳存」(黒本本館用集等)か。日葡辭書に「ハウゾンヨ ヲク」の用例が見える。